

6. 知的欲求

「子供は、情意的欲求と知的欲求を絡み合わせながら体験的活動を展開し、環境世界への主体的なはたらきかけを通して情報を得たり、知識を構成したり、技能を獲得したり、環境との付き合い方を身に付けたりなどして、自分の世界を拡げ、自己実現を感得する」とされています（生活科教育連盟研究紀要Vol.4 1992年）

知的欲求は、情意的欲求と対になって使われることが多く、情意的欲求が基盤となって高まっていきます。

知的欲求とは

『欲求』とは、広辞苑によれば、

『欲求』…ほしがり求めること。心理学では、動物や人間が行動を起こそうとする緊張状態のこと。

とある。

子供の活動・体験の意味を二つのレベルにおいてとらえてみる。

活動の中で、子供は興味・関心から自由に、そして自分の五感を使って対象に働きかける。この段階は、子供の情意的欲求に支えられた活動と言える。

次に、子供が対象に働きかけた時、対象から働きかけられることもある。その時に自分の見方、考え方とのズレを意識する。たとえば、活動がうまくいかなかったり、驚きや疑問・困難が生じたりして、活動自体の見直しが始まる。このことから内面的な思考が促されるが、この思考を促すものが知的欲求である。情意的な欲求は、「見たい、聞きたい、触れたい」、知的な欲求は「知りたい、分かりたい」という子供の言葉で表れる。

実践から

ザリガニを飼育する活動を考えてみます。子供は「ザリガニを飼いたい」「ザリガニと遊びたい」「赤ちゃんを生ませたい」などという思いをもちます。これは、情意的な欲求と言えます。

ところが、ザリガニを育てていく中で、ザリガニが自分の思うようにならないという事実（元気がない、えさを食べない、死ぬ）に直面した時に、ザリガニについてもっと知りたいと思うようになります。これは、知的欲求が芽生えてきた姿であると言えます。